

# 仕合わせの和

第205号  
元年. 4. 1  
(毎月1日発行)

## お題目との結縁

任職 谷川寛俊

私の後輩で、現在大分県で頑張っている廣田学良上人(妙親寺住職)が、ある機関誌に投稿していた文章を本人の了承を得て今月号にご紹介します。

私は農家の長男として誕生しました。4歳の時にネフロゼという腎臓の病気になり、九死に一生を得ました。当時、特効薬は日本には無かったようで、ドイツから取り寄せる薬しかありませんでした。

農家の父母が高額の薬代をどの様に工面したのか、子供の生命を助けたい一心であったとは言え、並々ならぬ経済的苦労があったと思います。ところが、特効薬であっても病気は快方へと向かわず、もう助からないかもしれないとの宣告を受け、それなら畳の上で送ってやりたいと父母は落胆の思いで、実家に近い田舎の病院へ私を移しました。全身が膿(うみ)だらけで歩くことも出来ない私は、来る日も来る日も病室の布団の中で泣き叫び、「いつ家に帰れる

の?」「治ったら帰れるから頑張るなさい。」「いつ治るの?」と、父母をいつも困らせたようです。小さな病院のことですから、声は病院中に響き、その叫び声を毎日聞いていた食事係の大蔵トヨさんという方が、「病気が重いよ。だから、一度Sさんを訪ねてみては?」と紹介してくれました。Sさんは俗に言う靈感が強い方だそうで、多くの人を救っているとのことでした。Sさんは在家の方でしたが、自宅の一隅にお堂を構え、お題目を唱えては「仏様が助かると仰っています。毎日一緒にお題目(南無妙法蓮華經)を唱えましょう」と希望ある予言をしてくれたのです。

念仏しか唱えたことがない言わば無信心な父母でしたが、お題目を唱えて助けられるのであればと、その日から無我夢中で祈りの日々が始まりました。長い線香が燃え尽きるまで、太鼓を打ち、お題目を唱え、Sさんに信仰についてのお話を頂き、それが終わると深夜父母はバイクで家に帰るとい、昼は農家の仕事、夜は祈りの生活を一年以上続けたというのです。それでも一進一退を繰り返す病状に父は「仏様は助かると言っているのに治らないではありませんか?」と不信を抱く心を吐露されると、Sさんは「必ず治ります」。

### 真成寺ホームページ

<https://bit.ly/2Gz55Mz>

編集・発行  
玉蓮山 真成寺  
編集部 谷川久仁子  
TEL・FAX 0765-22-2268  
携帯 080-3744-2523  
こちらの番号でも  
お寺につながります。

「もし治らなかつたらどうしますか?」と父が詰め寄ると、「もし治らなければ自分がお題目の信仰を止めます。でも、もし治ったらあなたは どうしますか?」

念仏の数珠を切つて日蓮宗に改宗する覚悟がありますか?」とSさんの方から厳しく詰め寄られた父は、「養子に來た立場ですが、お題目で子供が救われれば、御先祖様は改宗をきつと許して下さいませう。」と、決心することにしたのです。そして廣田家の家族が1つになった思いのこもった祈りのお題目は、やがて仏様に通じ、晴れて奇跡の退院を迎える事になったのです。

こうして廣田家は日蓮宗に改宗することになりました。このお話には続きがあります。その後、実は在家のSさんも、日蓮宗の僧侶として正式に出家することができたのです。

又、祖父は自分の命を孫の私に譲りたいと密かに誓願を立ててもいたようです。その後、祖父は病気の全快をその目で見届け、喜びの中、その生涯を終えました。

父が生前こう言っていました。「坊さ

んになつて人様にお話しをする機会があれば、必ずこの話をしてほしい。命懸けでお題目を唱えなければご利益はない」と、遺言のように言い残しこの世を去ったことが思い出されます。科学の時代にこのような話は古い迷信、たまたま運が良かったと思われるかもしれませんが、法華經とこのお題目信仰のお陰だと、私は心から信じ、僧侶としての道を歩いてきました。これからも頂戴した命を一人でも多くの人達に恩返しができますように精進してまいります。

